研究ノート

書物をめぐる記録を辿る
―『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』

森　田　由利子

Ⅰ. 序

『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』（*In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D. D.*）は、寿岳文章（1900-92）によって創られた小さな書物である[1)]。寿岳は、英国のロマン派詩人、ウィリアム・ブレイクを専門とした英文学者であり、ダンテ『神曲』の翻訳者、書誌学者、そして日本における和紙研究の第一人者でもあった。また、1932年頃より「向日庵本（こうじつあんぼん）」と称される私家本を出版したが、『追憶集』の制作はその最後の時期に位置付けられる。

『追憶集』は、その刊行に至る経緯を考えるならば、「約束の書物」であると言えるだろう。55歳の若さで急逝した恩師ウッズウォース博士（1883-1939）への思い、カナダへ帰国した夫人の切なる願いを胸

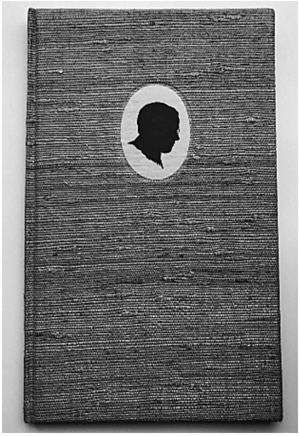

図１　『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』葛布版表紙

1)　以下、『追憶集』と表記する。ウッズウォース博士やこの書物の詳細、刊行に至る経緯については、拙稿「約束の書物が語ること―『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』」に記載している。また、中島「戦禍を超えた師弟愛―『ウッズウォース追憶集』―」において、「師弟愛の書」としての『追憶集』の意義が詳細に論じられている。

に、寿岳が幾多の困難を排して刊行を成し遂げたからである。また、早々に『追憶集』の企画・準備が始められたにもかかわらず、第二次世界大戦によって制作は阻まれ、実に 14 年の年月を経て書物の形と成るに至った。ある意味、「平和を体現する書」とも言えるのである。

さらに、「用の美」を唱えた民芸運動に連なる寿岳文章が創った『追憶集』は、控えめながら大層美しい。表紙は外村吉之介[2] (1898-1993) に用立てられた葛布（くずふ）で造られており、表紙上部には楕円が配され、その中に眼鏡をかけたウッズウォース博士のシルエットが小豆色でデザインされている（図１）[3]。手にすると、視線が自ずとその横顔に誘われ、飽かずに眺めてしまう。また、本文用紙には特別に手漉きをさせた因州和紙が用いられているが、その繊細な美しさは堅牢な造りの表紙で守られている。植物から生み出された葛布と和紙─『追憶集』は、「自然」から生まれ「自然」へと還る、「自然と融和する書物」なのである。こう考えてくると、厚さ１センチにも満たない小さな書物でありながら、今の社会に静かに警鐘を鳴らす存在であると言えるだろう。

だが、こういった重要性にも関わらず、『追憶集』は今まで余り着目されてこなかった。その所以は、限定出版されたため一般には殆んど流布しなかったこと、夫人へ贈ることを第一義としていたためであろうか、本文が全て英語で書かれていたこと、そして、一般には知られていないカナダ人宣教師の物語であり、限られた者のみが共感し得る内容が多く含まれていたからだろう。また、作者本人の名前が秘されていたことも影響したと思われる。寿岳の名は、本書 40 頁の最後に“B. J.”とのみ記され、本文が終わった後の、書物制作に関わる情報の中に「本の装幀をした」人物としてその名が出てくるだけである。

---

2)　ウッズウォース博士の教え子の一人であり、初代倉敷民藝館館長。寿岳とも付き合いが深かった。後述の寿岳の日記（1939 年 1 月 19 日）には、外村から送られた葛布が届いたと記載されている。

3)　大久保・笠原編『壽岳文章書誌』によると、楕円は「空押し」で、シルエットは画家、永島吉太郎の制作である（97）。永島吉太郎（1908-2007）は、1933 年 4 月より 1948 年 3 月末まで関西学院に在職し、1930 年代、ウッズウォース家と親しくしていたという。

さらに、寿岳自身が、この書物について公に語る言葉はそれほど多くはなかった。「『ウヅワース博士追憶集』刊行記」(1953)[4]、随筆「わがことながら」(1965)、そして送本の際に送られた２種類の添え状[5]があるばかりである。それらを読むと、言葉少なながらも『追憶集』刊行における寿岳の一方ならぬ苦労が伝わってくる。しかし同時に、そういった作者自身の記述を突き合わせてみると、些か矛盾する点を見出すこともある。まずは、『追憶集』の刊行年に関する揺らぎである。書籍にはローマ数字でMCMLII（1952年）と明記されているが、送本時に添えられた書面に記載されている日付は昭和28年(1953年) 5月となっている[6]。また、『追憶集』の刊行部数とカナダの夫人へと送られた冊数についてもはっきりしない。「わがことながら」では「ウズワース家へ百冊を届け」たと記載されている（928）が、添え状には「七〇部をウッヅワース夫人に贈呈し」とある。書籍には“limited to 300 copies”（「300部限定」）とあるが、添え状には「刊行部数三五〇冊」となっている。こういった疑問点を、日記や書簡といった一次資料の記録を辿ることで裏付けていき、『追憶集』刊行に関する事実関係を些かなりとも明らかにしたいというのが本稿の目的である。

Ⅱ. 日記

寿岳文章は、生涯、日記を書き続けたと言われている。向日庵資料である「寿岳文章日記」[7]を読むと、1923年8月31日、23歳の寿岳は「能ふかぎり汝の日記を充実せしめよ。それは汝の生涯の充実を最も力強く語るものである。」と記している。

4) 以下、「刊行記」と表記する。

5) 戦前の『追憶集』企画に賛同した予約者に送付された添え状と戦後の「再企画」への賛同者、および購入者に送られたであろう添え状（「感謝・報告・お願い」）の２種類がある。

6) 寿岳文章・しづ『ある夫婦の記録』の巻末の年譜においては1951年（昭和26年）に向日庵私版から刊行となっている（387)。

7) 「向日庵資料」として向日市文化資料館に保存されている。閲覧できたのは、1921年～1923年、1932年（1932年に限らない創作ノートのような内容)、1935年～1943年、1950年～1953年、1955年の18年分のみである。

若い頃の日記は饒舌で、詩の引用など創作ノートのような側面が色濃い記載も見受けられるが、ある程度の年齢を重ねた30代以降、寿岳は実に淡々と日々の暮らしを記録していく。そこに記されているのは、研究や読書、仕事の進捗、勤務先での出来事に加え、家族の体調、多くの知友との手紙のやり取りや贈答、家事、食事、買い物、観劇や展覧会の記録などである。何より、簡潔な記載の中にも、静子夫人はもちろんのこと、家族への深い愛情が感じられる。以下、そういった「寿岳文章日記」の中から『追憶集』に関する記録を拾い出し、刊行に至る経緯を検証していきたい[8)]。

1921年以降の日記の中で、寿岳が初めてウッズウォース博士に言及するのは、1922年3月16日、関西学院高等学部文科英文学科に在籍していた時のことである。日記の冒頭、「バーネットとウヅウォースの試験あり」と書かれている。その後も、寿岳の日記には、ウッズウォース博士との手紙やクリスマスカードのやり取りが記録されている。また、ウッズウォース博士が関西学院大学の初代法文学部長となり、寿岳が同学部の講師となった1934年以降は、度々ウッズウォース夫妻の自宅を訪問し、夕食に招待されたりしていることが記されている。ウッズウォース博士への学問的な信頼も厚く、1937年11月22日には、「英訳万葉集への助力」[9)]を依頼したと書かれている。しかし、寿岳にとって「いちばんしたわしい恩師」[10)]であったウッズウォース博士は、1939年2月6日、自宅で急逝するのである。日記によると、寿岳はその知らせを翌日の新聞で知り、取る物も取り敢えず大学へと駆けつけている。関西学院大学での学院葬は2月9日に行われ、その数日後、寿岳は悲嘆に暮れて引き籠る夫人を見舞っている。そして、2月20日には、早くも『遺稿集』の話が夫人との間で出ており、3月2日には、六甲ハウスで開催されたウッズウォース博士を記念する学会の創立委員会に出席しているのである。さらに、第二次世界大

8)　直接引用に際しては、漢字は新字体に改めることとする。

9)　「刊行記」によると、新村出の希望により、学術振興会『英訳万葉集』の校正の検討をウッズウォース博士に依頼したという。

10)　寿岳「わがことながら」(927)。

戦勃発後も、12月15日には、同僚であった竹友藻風（1891-1954）と「ウズワース氏遺稿集刊行」のプロスペクタス（趣意書）について議論、そして翌年、1940年２月23日には「ウズワース記念文集の趣意書を諸方へおくる」という記載がある。しかし、その後、「日ましに暗くなる時局」[11]によって、『追憶集』の制作・出版は阻まれることになったのである[12]。

筆者が確認し得た日記において、戦後、「ウッズウォース先生」の名前が寿岳の日記に初めて出てくるのは、1950年12月18日である。これにより、この時期には『追憶集』刊行の話が再始動していることを確認できる。同時に、この頃より、寿岳文章が長年勤めた関西学院大学を去ることを決意し、その意を周囲に告げていたことが日記の言葉からわかるのである。さらに1951年に入ると、『追憶集』の準備は本格的に進められていく。２月の日記は、寿岳が『追憶集』刊行のため、頻繁に人と会い、時には夜遅くまで寄附金集めに奔走している姿を記録している。そして、『追憶集』に刊行年として記載されている1952年になると、３月下旬から４月にかけて、寿岳はかなりの時間とエネルギーを執筆や編集作業に費やし、「終日在宅」という記載が目立つようになるのである。以下、それを示す日記の一部を抜粋したい。

> ３月22日（土）
> 曇。夕方より雨。終日在宅。
> In Memoriam H. F. W. 執筆にかゝる。
>
> ３月23日（日）
> 曇。時々雨。風強し。
> 終日在宅。Woodsworth Memorial Bookletにかゝる。

---

11) 寿岳「わがことながら」(928)。

12) 戦時下にもかかわらず、1943年２月６日には、「ウヅワース先生五周忌の記念祈祷式的追憶会」が開かれている。

３月24日（日）
終日在宅。Woodsworth M. B. にかゝる。

４月４日（金）
曇。夕方より小雨。
終日在宅。Woodsworth Memorial Book 15ページまですゝむ。

４月９日（水）
雨。午後に入って晴れる。
終日在宅。Woodsworth Memorial Book にかゝる。

この後、４月17日に寿岳は印刷業者、内外出版に原稿を渡し、1952年９月５日、『追憶集』の初校が完了することになる。

しかし、「初校了」と記された後、書籍の完成までには相当の時間と労力を要したようである。刊行作業についての記載は1953年にまで及んでいる。1953年の１月から５月までの間、『追憶集』の完成に向けて印刷業者との綿密な打ち合わせが重ねられていく[13]。また、寄附金の依頼も継続して行われていたことがわかる[14]。そして、『追憶集』が念願の完成を見たのは、1953年５月15日であった。寿岳は日記に「けふ Woodsworth Memorial Book 届けくる。予想通りの出来にて満足なり。夜、それに番号をうつ。」と記載している。日記によると、翌日、寿岳は出来上がったばかりの『追憶集』を、ウッズウォース夫人に届けるよう依頼していたアウターブリッヂ博士の自宅へと自ら届けに行っている[15]。そして、その後６月まで、寿岳は緻密なまでの配慮を怠らず、寄附者への挨拶や送本に追われることになるのである。

13)　４月14日に「内外へさし画をあづけ」とある。『追憶集』42頁のスケッチのことであろうか。

14)　５月13日に（添え状「感謝･報告･お願い」に名前が記載されている）石脇氏より「Woodsworth先生追憶集の寄附を貰ふ」と記録されている。

15)　同日、竹友藻風をも訪ねているため、１冊を手渡したと思われる。

ここまでして寿岳は何故『追憶集』の刊行をやり遂げようとしたのだろうか。むろん、恩師ウッズウォース博士への敬慕の念ゆえであったろう。様々な文献を見るに、ウッズウォース博士が周りの誰からも、とりわけ指導を受けた多くの学生から慕われていたことが良くわかる。「教授と学生のふれあいによる人格形成に重点をおきたい」[16]という教育者としてのスタンスもあったと思われるが、竹友藻風は「私の為る仕事の影にはいつも先生が立つてゐられた。どんな事を言つても拒絶せられたことはなく、否定せられたこともなかった」と恩師を悼んでいる（198-199）。寿岳もまた、『樫と菩提樹』（1966）の中で次のように書いているのである。

> 私に改宗をすすめなかったただ一人の宣教師、それは故ウズワース博士であった。戦後、私は博士夫人の依頼で、博士の伝記を英文で編み、一冊の本とした。その伝記を編みながら、私の心の自叙伝が、博士のそれとも内面的にはつながることの多いのに驚いた。（251）

寿岳にとってウッズウォース博士は、自らを理解し、いかなる時もその存在を肯定してくれる信頼できる「先生」であったのである。

また、小さな書物ながら、寿岳には、一度手掛けた本創りを成し遂げたい、『追憶集』制作に際して心に描いた構想を形にしたいという願いもあったのではなかろうか。中島（2022）は、敬愛する新村出（1876-1967）の「『薩道先生景仰録』のひそみにならって」、寿岳が『追憶集』を創ったと指摘しているが（92-93）、『追憶集』は、装幀においても寿岳ならではの美意識と強い思い入れが随所に感じられる書物となっている。葛布の美しさはもとより、表紙に配された博士の「横顔のシルエット」は、ヨーロッパにおいて18世紀半ばから19世紀半ばにかけて流行した肖像画のスタイルを模したものなのである。

さらに、寿岳の日記は、『追憶集』刊行の最終段階が長年勤めた関西学院大学を去ることを寿岳が決意し、辞職に至る時期と重なっていることを教えてくれる。両

16)　池田「籐椅子の里帰り」（7）参照のこと。

者は並走するかのように進んでいったのである。1952 年３月７日、寿岳は関西学院大学の研究室を全て片付け、荷物を持って帰っており、「これでいよいよ関学との縁がきれるかと思ふとさすがに感深し」と日記に記している。その後、先述した通り、寿岳は『追憶集』の執筆に集中し、４月 17 日に原稿を仕上げ、印刷業者に手渡しているが、それは、新しい勤務先となる甲南大学の入学宣誓式の２日前のことであった。実際には 1953 年刊行であるにもかかわらず、『追憶集』に記載された出版年が 1952 年となっているのは、もちろん、タイトルページの印刷後、想定以上に刊行作業が遅れたせいであろう。しかし、「1952 年刊行」というのは、寿岳にとって、譲れないものであったと解釈できる。何としてでも、関西学院大学を去るまでに恩師へ捧げる『追憶集』を仕上げたいと考えたのではなかろうか。

Ⅲ. 書簡

次に、寿岳とウッズウォース夫人（Mrs. Ada Frances Woodsworth）との間で交わされた書簡を検証し、「寿岳文章日記」から確認できた『追憶集』刊行の大まかな流れについて、再度、考察を試みたい。まず、「向日庵資料」として保管されている英文書簡[17]の中から、２通の原文を引用する。以下、英文書簡については拙訳も付していく。

Kwansei Gakuin
Dec. 20 '34.

Dear Prof. + Mrs. Jugaku

How can I thank you enough for the beautiful book you have presented to me!

I value your generosity quite as much as the book itself.

17) 「向日庵資料」の書簡に関しては、筆者は実物を確認できていない。今回引用した書面は、井上琢智先生よりデータを共有して頂いたものである。

To think that you have given me this “child” of your mind and heart, that you both have made with such care and labor and skill. It will be henceforth one of two or three exceptionally choice and valued books in my possession.

Again my most sincere thanks, and may you both have a very Merry Christmas and Happy and Prosperous New Year.

Most Cordially
Ada F. Woodsworth

関西学院大学
1934年12月20日

親愛なる寿岳先生、そして寿岳夫人

美しい本をお贈りくださり、何と御礼を申し上げたら良いのでしょう！

本と同様にあなた方のお気持ちをとても嬉しく思います。

こんなにもお二人が心を配り、労力をかけ、巧みに創られたもの、お二人の心から「生み出されたもの」をくださったとは。この本は、今後、私の持っている本の中でも一二を争う格別素晴らしい、価値ある１冊となるでしょう。

重ねて私の心よりの感謝を申し上げます。お二人がとても楽しいクリスマス、そして幸せで実りある新年を迎えられますよう。

心を込めて
アーダ F. ウッズウォース

上記は、1934年にウッズウォース夫人より届いた手紙である。寿岳文章がウッズウォース夫妻に贈った「向日庵本」への礼状であるが、「美しい本」とは、日付から推測するに、前年（1933年）に刊行されている向日庵本、*Exoteric Writings of William Blake*（『英文ブレイク著作選集』）であると思われる。送られた時期を考えると、夫妻へのクリスマスプレゼントの意味合いもあったであろう。恩師夫妻との親密な関係が感じられる書面である。

そして、次の書簡は、戦後２年が経過した時期に夫人より届いたものである。寿

岳が送ったカードへの返信となっている。長い書簡のため、冒頭のみを引用する。

Aug. 26 '47.

Dear Dean Jugaku

It was a great surprise and pleasure to receive your card this morning sent on to me from Toronto to Kingston where I am visiting my sister. Your card was written on July 9 so it took a long time.

I just sent a letter a couple of days ago to Dr. Outerbridge telling him of my desire to have some kind of memorial at K.G. for my husband. Dr. Outerbridge had suggested some kind of a chapel before I left Japan in 1939 but then the war spoiled all that as it did the book "In Memoriam".

1947年8月26日

親愛なる寿岳学部長

今朝、トロントから転送されてきたあなたのカードを受け取り、何と驚き、そして嬉しかったことでしょう。私は今、姉を訪ねてキングストンに居ります。カードには7月9日と日付けがありましたので、届くまでに長い時間がかかってしまいました。

ちょうど数日前にアウターブリッヂ博士に手紙を送り、夫のため、関学に何か記念となるものを遺したいとの私の願いをお伝えしました。1939年に私が日本を離れる前、アウターブリッヂ博士はチャペルか何かをと提案してくださっていましたが、その後、あの戦争が全てを台無しにしてしまいました。『追憶集』がそうであったように。

寿岳の「刊行記」には、「戦争が終わったとき、たまたま日本に進駐してゐた博士の令息から、追憶集出版の強い希望を依然として夫人が持つていられると聞き、どうあってもそれを実現しなければならぬと私は考えた」とある。夫人の書面の文面からも、ウッズウォース博士が亡くなって8年が経過してなお、夫人が『追憶集』

の刊行を望んでいることが伝わってくる。そして、この手紙には、次のようにも書かれているのである。

> I have been so happy on various occasions to show your beautiful books on “Blake” to my friends and to tell them the story of your wife helping you with the illustrations.
>
> I am delighted that you are the successor to my husband as Dean. The real and the best memorial to him is truly the loving loyalty in the hearts of his students and co-workers.

> 私は折あるごとにあなたが贈ってくださった美しい「ブレイク」の本を喜んで友人たちに見せ、奥様が挿絵を手伝われたのだという話をしてきました。
>
> 学部長として夫の後継者になられたことを嬉しく思っています。夫にとって、真の、そして最高の記念碑は、まさしく、学生や同僚の方々の心の中にある愛溢れる夫へのお気持ちです。

寿岳は『追憶集』刊行の道のりを、自ら「受難史」[18]とまで言い表した。それを最後まで歩み続けた動機の一つは、「刊行記」にも記載があるように、ウッズウォース博士夫妻が寿岳の創る「向日庵本」を大いに喜び、愛してくれたことへの感謝ゆえもあっただろうと思われるのである。

では次に、ウッズウォース夫妻のご遺族から提供して頂いた２つの手紙を引用していきたい。まず、ウッズウォース夫人へ贈られた『追憶集』と共にカナダで保管されていた寿岳の手紙である。1951年、休暇帰国でカナダへ帰ろうとするアウターブリッヂ博士へ宛てて書かれたものであるが、急いでいたのか走り書きの様相で、文字が少し乱れている[19]。また、文面から、『追憶集』の本文用紙として使用された和紙（あるいはそれと同等の和紙）の上に書かれていることがわかる（図２）。そ

18) 寿岳「向日庵本の思い出」(952)

19) 日記などに記載された寿岳の手による英文字は書き慣れた美しい文字である。とりわけ、“Woodsworth”の“W”の文字が印象的で、心に残る。

して何より、記載された日付が『追憶集』刊行のスケジュールを再確認するために極めて重要である。

Feb. 9, 1951

Dear Dr. Outerbridge:—

This is the sample of the paper and format to be used for the memorial book of the late Dr. Woodsworth. The job is going on quite smoothly. Please tell this Mrs. Woodsworth with my hearty wishes to her.

Yours sincerely ever

B. Jugaku

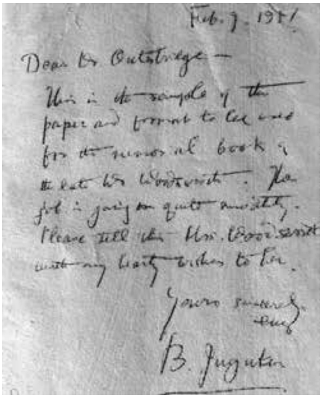

図2　寿岳からアウターブリッジ博士への手紙（ウッズウォース夫妻のご遺族から提供された写真データ）

1951年2月9日

アウターブリッジ先生

　これが故ウッズウォース先生の追憶集のために使う本文用紙と形式のサンプルです。仕事はとても順調に進んでおります。どうかウッズウォース夫人にそのことを、そして私から心よりよろしくとお伝えください。

敬具

寿岳文章

手紙の日付け、1951年2月9日は、上述のように、寿岳が『追憶集』刊行に向けて準備を本格化させ、寄附金集めに苦心していた時期である。「順調に進んでいる」という事実はある意味正しいと言えるが、その裏の並々ならぬ苦労については一切触れられていない。そしてこの書簡データに関して興味深いのは、寿岳が書いた短い手紙の下に、ハワード・アウターブリッジ博士が夫人に宛ててメッセージを書き加えていることである[20]（図3）。これもまた、刊行の流れについての有益な情報を与えてくれる。

20)　アウターブリッジ博士がいつ書き加えたのかについての正確な時期は検証できていない。

Dear Ada,

Sorry not to have gotten this to you before. Jugaku promised me that he would make the "Memory Book" his first task this year. I wrote the introduction for [it][21] just before I left. Hope you have [a] nice trip.

Affectionately

Howard

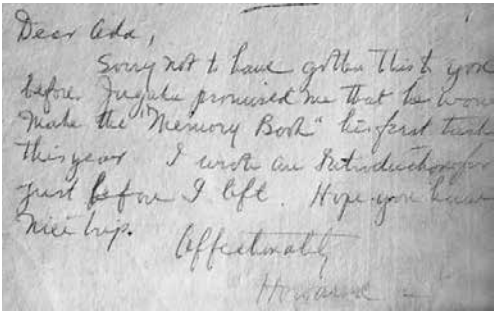
Dear Ada,
Sorry not to have gotten this to you before. Jugaku promised me that he would make the "Memory Book" his first task this year. I wrote an introduction for just before I left. Hope you have nice trip.
Affectionately
Howard

図３　図２の手紙の下に書かれた夫人へ宛てたアウターブリッヂ博士のメッセージ（ウッズウォース夫妻のご遺族から提供された写真データ）

アーダ

早くこれを届けられなくて申し訳ない。寿岳は『追憶集』を今年最初の仕事として取り掛かると僕に約束してくれたよ。日本を発つ前に序文を書いてきた。楽しい旅行を。

心を込めて

ハワード

『追憶集』の序文が、1951年の２月、アウターブリッヂ博士が日本を発つ前に書かれたことが確認できるのである。

そして最後に引用する書簡は、1953年４月８日の日付がある、寿岳から夫人へ宛てた手紙である[22]。こちらは手書きではなく、タイプ打ちで、文末に"Yours affectionately, Bunshō Jugaku"とのみ手書きで記されている。同日の「寿岳文章日記」にも「かへりに大阪へより、Woodsworth夫人に航空便を出す」と記載されていることからも、寿岳にとって、この手紙が大きな意味を持っていたことがわかる。以下、冒頭のみを引用する。

21) 写真データの右端が切れているため、〔it〕と〔a〕については、省略されていたかもしれない。

22) 同年３月17日の寿岳の日記に「Mrs. Woodsworthより便り来る」の記載があるので、その返信であったと考えられる。

8th April, 1953

Dear Mrs. Woodsworth: —

How shall I apologize to you for my keeping silence so long? The basic reason of it was that if I wrote to you at all I must write fully, because I left Kwansei Gakuin this time year.

But a few words of our "memorial book" first. Everything still goes slow in the post-war Japan, and the book, which ought to have been published by the end of last year at the latest, has just been printed off and is now in the hands of the binder. So it will be completed during this month, I believe. Small and humble as it is in size and format, my every affection for Woodsworth Sensei has been poured into it. Everything was done by myself. There is no part of it on which either my hand or my eye did not dwell, from cover to cover. The edition is limited to 350 copies, and 100 copies will be sent to you through Dr. Outerbridge. You say you don't need so many now, but please keep them as keep-sakes, for some day someone may perhaps want it as a story of a brave and humane Christian pioneer.

1953年4月8日

親愛なるウッズウォース夫人

長い間ご連絡も差し上げず、何とお詫びを申し上げたら良いでしょうか。ご無沙汰してしまった理由は、もしお手紙を差し上げるとなれば、全てを書かなければならなかったからです。私は一年前に、関西学院大学を去りました。

ですが、まずは、『追憶集』についてお知らせ致します。戦後の日本では、未だ全てに時間がかかり、遅くとも昨年末までには刊行されるべきであったのですが、ようやく印刷が仕上がり、現在、製本業者に委ねています。なので、今月中には仕上がるものと思っています。大きさや体裁においては小さく慎ましやかなものではありますが、ウッズウォース先生への、私のあらん限りの敬愛の念を注ぎました。全て、私の手に成るものです。隅から隅まで、私の手や目が届かなかったところはありません。限定350部で、そのうち100冊をア

> ウターブリッヂ先生に託してお送りするつもりです。今はそんなにたくさんは要らないと仰るかもしれませんが、どうか記念の書物としてお手元にお持ちください。いつの日か、ある勇敢で慈愛深い宣教師の物語として、誰かが『追憶集』を望まれるやもしれません。

この手紙も、1953年4月初旬の時点において『追憶集』がまだ完成していなかったことを明らかにしている。書面では「今月中には」と記されているが、「寿岳文章日記」が示したように、この後『追憶集』の刊行は、1953年5月半ばまでずれ込んだのである。

カナダへ届ける手筈はいち早くなされ、上述のように、『追憶集』完成の翌日、5月16日にアウターブリッヂ博士の手に託されてはいるが、夫人のもとへと届くまでには更なる日数を要したであろう[23)]。しかし、寿岳文章は、ウッズウォース夫人が亡くなる3年前[24)]、14年余りの年月を経て、夫人との約束を果たしたのである。そして、それは、「一旦約束したことに対して、あくまで責任を負おう」[25)]と決意した自分自身との約束であったと考えられる。

IV. 書物に付された記録—限定番号と記された名前

では最後に、『追憶集』は結局何部創られ、そのうち何冊がカナダに送られたのかという問題に対して考察を試みてみたい。この点については、「寿岳文章日記」には何も記されてはいない。ただ、先に引用した1953年4月8日付の手紙の文面から考えると、創られたのは、添え状の記載通り、350部であったと考えられる。では、当初の計画通り、そのうちの100冊がカナダに送られたのだろうか。

---

23) アウターブリッヂ博士が『追憶集』をどのようにしてカナダの夫人へ届けたのかについては確認できていない。

24) ウッズウォース夫人が亡くなったのは1956年12月29日である。

25) 「刊行記」

『無名の歌』(1935) の刊行記録から始まる「向日庵私版刊行台帳」(「向日庵資料」) を繰ると、寿岳の出版（造本や送本）にかかる苦労がここまでであったかと圧倒される。しかし、残念ながら『追憶集』に関する記録はその中には含まれておらず、その刊行や送本に関する詳細な文書は未だ見出せていない。しかし、寿岳が手ずから記した限定番号を確認することで、刊行部数やカナダに送られた冊数をある程度推測することができる。番号は思いの外雄弁に語ってくれるのである。

筆者が2019年より始めた『追憶集』の所在の確認作業は余り進んではいないが、現時点で、日本国内では43冊の所在を確認し、そのうち25冊を実際に手にして、限定番号をはじめ、それぞれの保存状態や付属情報を見ることができた。また海外においては、カナダのトロント大学（ヴィクトリアカレッジ）の図書館に２冊所蔵されており[26)]、ウッズウォース博士のご遺族の手元には『追憶集』が９冊あることを確認できている[27)]。何より喜ばしい調査結果は、限定番号１番の『追憶集』は、やはり、ウッズウォース夫人に贈られ、夫妻の長女、Mary Ellen Bews氏の手から、その長女の方へと受け継がれ、今も大切に保管されてカナダの地にあると判明したことである(図４)。

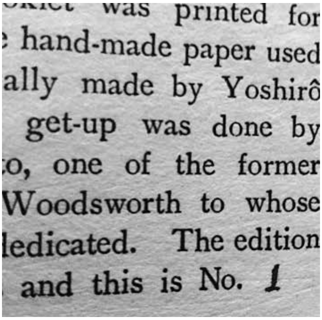

図４　寿岳手書きの限定番号１番（ウッズウォース夫妻のご遺族から提供された写真データ）

では、最終的にカナダに送られたのは何冊だったのだろうか。確認し得た限定番号を整理してみると、国内で筆者が手にした『追憶集』の番号は、３（寿岳文庫)、６（竹友文庫)、90（臼田文庫)、101、121、131、132（布川文庫)、134、140、142、147、160、164、181（寿岳文庫)、198、207、225、239（藤原恵文庫)、243、249、

26)　オンライン上、Internet Archiveにも１冊挙がっている。また、1953年６月１日の日記や「刊行記」から、英国詩人エドマンド・ブランデン（1896-1974）にも１冊送ったことが明らかであるが、現時点で、その所在は未確認である。

27)　６名のご遺族が調査に協力してくださり、合計９冊が確認できた。

283、288、299、加えて、番号ではなく波ダッシュ（～）のみ記入された２冊である。一方、現時点でカナダにおいて確認できた『追憶集』の番号は、１、16、33、46、50、53、57、60、61、62、75となっている。さらに、実際に手に取ることはできてはいないが、知り得た番号などをも考慮した上で、上記の数字を眺めてみると、やはりカナダに送られたのは添え状に記載された通りであったと思われる。すなわち、カナダへ送られた冊数は70部で、付けられた番号は、夫人に贈られたNo.1に加え、15番辺りからの70冊ほどであったのではないかと推測できる[28]。また、表紙の装幀も葛布装と（薄い黄色の）クロス装の２種類が創られているが[29]、カナダに送られたのは全て葛布装であったと考えてよいだろう。なぜなら、国内で確認し得たクロス装版は、寿岳が「自家用」として手元においたと思われる181番を除けば、280番台以降の遅い番号、あるいは波ダッシュのみが付けられていたからである。

加えて、限定番号以外にも、現存する『追憶集』に記された記録（寿岳の署名、献呈署名、所蔵先の印や蔵書票など）からも有用な情報を得ることができる。例えば、国立国会図書館 布川文庫に所蔵されている『追憶集』の見返しには、寿岳が手書きで“13 June 1953 To K. Nunokawa Esq., With the compliments of B. J., editor of the booklet”と記載している。この直筆メッセージは、「寿岳文章日記」からも明らかな、寿岳と布川角左衛門（ぬのかわかくざえもん）（1901-96）との当時の交流を裏付ける[30]。また、1953年６月13日という日付は、寿岳が山本悍右（かんすけ）（1914-87）に『追憶集』を送った際の封筒（図５）の消印、その日付（1928年６月５日）とほぼ同時期であり、

28) むろん、『追憶集』70冊を託したアウターブリッヂ博士にも献呈されたと思われる。

29) 高橋『向日庵・宗悦・志功の限定本』によると、『追憶集』の表紙の装幀にはもう１種類、紬装版があったという（67）。

30) 「向日庵私版刊行台帳」を見ると、備考欄に「署名希望」や「署名すること」と記載されていることがある。献呈署名に関しては、購入者からの希望に沿って署名された場合もあったろうと思われるが、「寿岳文章日記」を確認すると、この時期、布川と寿岳が親しくしていたことがわかる。

共に、国内における『追憶集』送付時期の証左となってくれるのである[31]。

さらに、『追憶集』の送本時に添えられた書面「感謝・報告・お願い」に記載された寄附者の名前も刊行当時の情景を幾分か語ってくれる。「刊行記」には、「関西学院の同窓生を中心に、故博士を知る者にも知らぬ者にも苦衷を訴えたところ、凡そ一年後には、ほぼ出版の目やすがつくほどの寄附金を集めることができた」とあるが、実際は、必要な資金調達はかなり難航したようである。そういった中、寿岳の企画に賛同し、高額の寄附をした人物として網谷（あみたに）市三郎氏の名前が添え状に挙がっている。調べたところ、網谷氏は、関西学院大学（高等商業学部）を1922年3月に卒業しておられることがわかった。剣道と英語に打ち込む文武両道の学生時代を、寿岳文章とほぼ同時期に過ごされたことになる。ご遺族にお話を聞くと、網谷氏は寡黙で篤実な人柄であり、同時代を生き、突出して優秀であった寿岳を尊敬し、その活躍を称え、喜んでおられたという。また、商家を継ぐため学問の道以外に進まれたが、東京出張の度に神田で石炭箱一杯の古書を買い込まれるほど、何より本がお好きであったとのことである[32]。寿岳の苦境を支援されたのも肯ける。『追憶集』は、そういった人の思いを内包し、それらが結実した書物であると言えるだろう。

図5　送本時に山本悍右宛に送られた封筒（筆者所有）

31)　寿岳「わがことながら」に記されているように、書留での送付となっている（928）。写真家であり詩人でもあった山本悍右は、1933年、柳宗悦による民藝誌『工藝』の会員となっており、「向日庵私版刊行台帳」を見ると、向日庵本『絵本どんきほうて』（1936年）なども購入している。

32)　網谷市三郎氏については、大国・楠本編『明治の商店―開港・神戸のにぎわい』4頁参照のこと。

V. 結び

出版から既に70年の年月が経ち、残念ながら、『追憶集』出版の経緯、その詳細を知る関係者から直接話を聞くことは、ほぼ不可能となりつつある。1999年当時、ウッズウォース博士の次男、ディビッド・ウッズウォース氏が「自分の父親の残したものもたくさんあったが、兄や姉たちが持っていた物はその家族により散逸してしまった」と残念がっておられたという[33)]。しかし、3年前、カナダのウッズウォース博士のご遺族に協力を依頼したところ、快く応じて頂き、上述のような貴重な書簡や情報を得ることができたのである。ただ、ご遺族の手元に遺された『追憶集』でさえ、そのほとんどが、仕舞われた箱の中で眠っている場合が多かったことも実状である。消えゆく記憶を留めるため、今後も一次資料を含めた記録を辿り続け、埋もれたこの小さな書物に少しでも迫り、光を当てたいと考えている。

参考文献

池田裕子「籐椅子の里帰り～ウッズウォース先生から石本雅夫先生を経て旧院長室へ～」『学院史編纂室便り』No.42、関西学院大学 学院史編纂室、2015年、7-8頁。

———.「カナダ訪問記― C.J.L. ベーツ第四代院長関係資料調査の旅―」『関西学院史紀要』第6号、関西学院学院史編纂室、2000年、154-193頁。

今村秀太郎『宗悦本と向日庵本』古通豆本20 日本古書通信社、1974年。

大国正美、楠本利夫編『明治の商店―開港・神戸のにぎわい』神戸新聞総合出版センター、2017年。

大久保久雄、笠原勝朗編『壽岳文章書誌』寿岳文章書誌刊行会、1985年。

笠原勝朗編「寿学文章専載本・分載本・向日庵本一覧」『壽学文章書物論集成』、1031-45頁。

———.「先生と向日庵私版」『壽学文章書物論集成』、1076-78頁。

クランメル、ジャン・W. 編『来日メソジスト宣教師事典 1873－1993年』教文館、1996年。

志賀勝「ウヅワアス先生追想録― “In Memoriam H. F. Woodsworth”」「関西学院大学英米文学会会報 創刊号」1953年、『英米文学会会報 復刻版』、関西学院大学英文学会、2014年、2頁。

33) 池田「カナダ訪問記」(182)。

寿学文章 *In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D.* 向日庵私家本、1952 年。
――― .「『ウヅワース博士追憶集』刊行記」『日本古書通信』第 18 巻、15 号、1953 年 10 月 15 日、7 頁。
――― .『壽学文章書物論集成』沖積舎、1989 年。
――― .「向日庵本の思い出」『壽学文章書物論集成』、949-61 頁。
――― .「わがことながら―十二年ぶりにつくりあげた約束の本」『壽学文章書物論集成』、927-29 頁。
寿学文章・しづ『樫と菩提樹』白鳳社、1966 年。
――― .『ある夫婦の記録』寿学文章・しづ著作集２、春秋社、1970 年。
寿岳文章 人と仕事展 実行委員会編『寿岳文章 人と仕事 展』寿岳文章 人と仕事展 実行委員会、2021 年。
新村出『薩道先生景仰録』ぐろりあ そさえて、1929 年。
高橋啓介『向日庵・宗悦・志功の限定本』湯川書房、1983 年。
竹友藻風「ウッズワス先生を悼む」『鶺鴒』七丈書院、1942 年。
中島俊郎「戦禍を超えた師弟愛―『ウッズウォース追憶集』―」『甲南大學紀要 文学編』170、甲南大学文学部、2020 年、33-46 頁。
――― .「寿岳文章の軌跡」『向日庵』第５号、特定非営利活動法人向日庵編集発行、2022 年、81-97 頁。
長野裕子「寿岳文章と向日庵本」『向日庵』第３号、特定非営利活動法人向日庵編集発行、2020 年、74-99 頁。
文學會編輯部編『文学部回顧』関西學院文學會、1931 年。
文学部史編集委員会編『関西学院大学文学部 60 年史』関西学院大学文学部、1994 年。
宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』研究社、1999 年。
森田由利子「約束の書物が語ること―『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』」『エクス 言語文化論集』第 11 号、関西学院大学経済学部研究会、2019 年、231-249 頁。
Jackson, Emily Nevill. *The History of Silhouettes.* John Buxton Publishing, 2022.
Piper, David. *The English Face.* National Portrait Gallery Publications, 1992.
「五十週年祭を控えてウッヅウオース部長突如逝く」『関西学院新聞』号外、1939 年２月８日。

【謝辞】
何よりもまず、向日庵資料（「寿岳文章日記」や「向日庵私版刊行台帳」）の閲覧に関して、向日市文化資料館の玉城玲子館長、および、文化資料館の皆様に多大なるご配慮を賜った。また、前関西学院大学学長 井上琢智先生には、貴重な書簡データを共有して頂き、池田裕子氏をはじめとして、関西学院大学学院史編纂室の皆様には変わらぬご助力を頂いた。カ

ナダの地におられるウッズウォース博士のご遺族の方々、ならびに網谷市三郎氏のご遺族には不躾な問い合わせに対し、丁寧にご対応、そして情報を提供して頂いた。最後に、甲南大学名誉教授であり、NPO 法人向日庵理事長である中島俊郎先生には常に得難いご教示を賜っている。記して感謝の意を表したい。

なお、本研究成果の一部は、科学研究費基盤研究（C）（研究課題番号：22K00417）の助成を受けて行ったものである。